

15歳で親元を離れるため 早めの金融教育が必要

日本最南端の有人島・波照間島にあ

る波照間小中学校は、小学生34名、中学生19名（2022年4月現在）の中併置校となります。人口500人ほどの小さな島には、スーパーやコンビニエンスストアなどの商業施設がなく、都市部から共同購入した商品や島民が収穫した農作物・海産物等を販売する共同売店が、島のコミュニケーション経済の中心として島民の生活を支えています。2020年度にこの学校へ赴任

した山本先生は、島の子どもたちを取り巻く環境から、消費者教育を意識した金融教育の必要性を感じました。「島には中学校卒業後の進学先がないため、子どもたちは毎年3月に弱冠15歳で親元を離れていきます。それまでに消費者教育や金融教育など、一人立ちに必要な知識や経験を学んでいかなければなりませんが、現状は十分とは言えません。多様な経済活動の経験に制約があるこの島では、早い段階から消費者教育を意識した金融教育を体系的に学ばせる必要があると考えました」。

「経済活動の一連の流れに参加させることで、1年生でも金融経済の基礎が学べると考えました。また、当事者意識を持たせることも重要と思い、きゅうりの値段決定などさまざまな場面で、児童の意思決定を尊重するようしました」。

消費者教育を重視した山本先生は、児童が育てたきゅうりを共同売店で販売し、稼いだお金で商品を購入する「生産と消費」の体験学習の指導過程を作成しました。



沖縄県竹富町立波照間小中学校



山本銀兵教諭

（2022年度より沖縄県那覇市立上間小学校に赴任）

「離島のコミニユニティ経済を生かした金融教育」 小学1年生が生活科を中心に 「生産と消費」の学びを実践

Part②では、沖縄県の竹富町立波照間小中学校（以下、波照間小中学校）の小学1年生に対する、消費者教育を取り込んだ金融教育の実践をレポートします。児童たちは波照間島独自のコミニユニティ経済の中心となる共同売店で、自分たちが育てた野菜を販売し、生産者と消費者の視点から金融教育を学びました。この実践授業の報告で「第18回金融教育に関する実践報告コンクール」の優秀賞を受賞した山本銀兵先生に、授業の特色や工夫、児童の反応や学習成果、今後の抱負などについてお話をうかがいました。



生活科を中心とした 「生産と消費」の体験学習

児童たちは学級の友だちと仲良くなるために企画を話し合い、それなりにお金がかかる企画が挙がりました。

（URL）https://www.shiruporuto.jp/education/contest/container/concours_kyoin/2021/pdf/21kyoin004.pdf（最終更新日：2022年7月10日）

各教科が自然に連動して 一步進んだ学びを体験

実際の実践授業の具体的な指導過程と共に、児童の反応や学習効果などを紹介します。

■仲良く遊ぼう（特別活動）

児童たちは学級の友だちと仲良くなるために企画を話し合い、それなりにお金がかかる企画が挙がりました。

山本先生は2021年度より小学1年生の担任となり、今回の実践授業に取り組み始めました。

「小学校低学年の学習では、児童の具体的な体験や経験を重視する生活科での学びが中心的な役割を果たすと考

え、生活科を基軸として各教科・領域を関連させた金融教育カリキュラムを作成しました」。

消費者教育を重視した山本先生は、児童が育てたきゅうりを共同売店で販売し、稼いだお金で商品を購入する「生産と消費」の体験学習の指導過程を組み立てました。

「経済活動の一連の流れに参加させることで、1年生でも金融経済の基礎

が学べると考えました。また、当事者意識を持たせることも重要と思い、き

ゅうりの値段決定などさまざまな場面

で、児童の意思決定を尊重するようにしました」。



Part②



自分たちで収穫したきゅうりに生産者シールを貼り、自作の看板と共に共同売店に陳列。すぐに完売した



児童たちの感想。一生懸命世話をして出荷ができた喜びや、栽培活動への意欲の高まりを感じる声もあった



この活動を自分事と捉えるように、プランターを1人ずつ用意。きゅうりと背比べが毎朝の日課になった



町探検の授業で共同売店へ。気になる商品の値段を調べることで、商品の相場についての感覚的な理解を促した

「お金がかかることを伝えると、お母さんにもらうと言う児童もいれば、諦めモードになる児童も。金融教育の出発点として、お金の必要性を認識する学びになつたと思います」。

■波照間探検隊（生活）

■パーティーをしよう（特別活動） ■野菜を上手に育てよう（生活）

町探検の授業で共同売店へ行つたあと、友だちと仲良くなるための企画を再度話し合いました。栽培しているきゅうりを共同売店で販売して、そのお金でパーティーを行うことに。

「児童たちの『おいしいきゅうりを売つて、パーティーのお金を稼ごう』という目的意識が明確になりました」。

■値段を調べよう（生活）

■文を作ろう（国語）

■看板を作ろう（図工）

きゅうりを1本500円で売りたいと言うなど、児童たちは適正な値段がわかつていなかつたため、共同売店で商品の相場を理解させました。

「きゅうりを収穫後、国語で『誰が何を作り、いくらなのか』を伝える生産者シールの文を作成しました。図工では、きゅうりのおいしさを表現する看板を作りました」。

■大きい数を数えよう（算数）

売上が貯まるごとに、算数の授業で集計を行いました。

「1年生にとつて難しい計算ですが、1年生では習わない筆算を知りたがるなど、責任を持ってお金と向き合い、管理する能力の芽生えを感じました」。
※このあとのパーティー活動は、コロナ禍によつて中止に。

山本先生は今回の実践授業についてこう話します。

「各教科の学びに『きゅうりを共同売店で買ってもらう』という消費者教育の意識付けをしたことで、図工では『絵を描く』、国語では『文字を書く↓お客様に伝わるようにきれいな文字で明確に書く』など、各教科が自然に連動して一歩進んだ学びの実践につたと実感しています」。

今後の小学校教育における金融教育の重要な課題とは

今後の金融教育への取組みについて、山本先生はこう考えています。

「今の子どもたちは、ゲーム課金や電子マネーの使用が消費活動の主流となり、消費活動をしている自覚が薄いように感じます。それを小学校教育でどう学ばせるべきか、今後の重要な課題であると考えています。そのためには、私自身も金融教育の学びを深め、確かな知識を持つて子どもたちに向かっていこうと思います」。